

小檜山ルイ

『帝国の福音——ルーシー・ピーボディとアメリカの海外伝道』

(東京女子大学学会研究叢書30、東京大学出版会、2019年)

安 武 留 美

本書は、1880年代はじめから死の直前までアメリカの海外伝道事業に深く関わったルーシー・マギル・ホワイトヘッド・ウォータベリ・ピーボディ (Lucy McGill Whitehead Waterbury Peabody, 1861–1949) の社会活動と人生体験を軸に、産業化の本格化した新興国アメリカが「帝国」として国際的影響力を拡大した時代の、社会、宗教、政治文化の変容をグローバルな視点で描き出した大作である。19世紀に高揚した中産白人女性の社会運動は、そのほとんどが北部プロテスタント教会をベースに「利他的」と自己認識するボランティア活動に起源を持つにもかかわらず、プロテスタント教派教会の複雑な伝道事業の一環をなした女性伝道組織やその活動の研究は、主にキリスト教神学や伝道史の専門家が扱う分野であった。そのため、禁酒や婦人参政権など、より世俗的な女性たちの社会運動に関する研究とは距離を置いてきた。本著は、そのような研究上の溝を橋渡ししてくれる貴重な一冊で、アメリカの海外伝道事業またグローバル化の進む現代のフェミニズムのあり方にも影響を及ぼした一人の女性の生涯を、各分野の高度に専門的な概念や用語を解説しながら、歯切れの良い文体で物語ってくれる。

序文には、アメリカ史研究者である著者がプロテスタント海外伝道事業の一端をなす女子教育機関で学び現在は教える立場にありながら、インサイダーにはなり切れないアウトサイダーであることが述べられているが、本著にはその微妙な立場が最大限に生かされているといえるだろう。本書を完成させるために著者が20年の歳月にわたって収集・解説したという膨大な資料の中には、ウォータベリ夫人として夫の伝道活動を支えたインド時代の夫婦の日記をはじめその後友人となった人々との間で交わした手紙や彼らの記憶、国勢調査記録などピーボディの私的な記録や資料、また関わった伝道組織、事業、会合、出版物などのアーカイブ資料や新聞記事、著者の所属先の内部資料、さらには著者自らがピーボディまた娘夫婦の足跡をたどって見聞した情報などが含まれる。時折インド、アメリカ、フィリピン、日本のローカルな情景を詳細に描き出し、アメリカ史、西洋史、アジア史、キリスト教史、伝道史、女性史、社会史を横断して多岐にわたるトピックに言及する本書は、どの分野の専門家にとっても新鮮な情報や解釈を満載している。本書から何を讀みとるか、またどのような示唆を得るかは、読み手の専門や興味によって大きく異なるであろう。

序論では、執筆にあたっての著者の検討課題——同時にそれは読者への道標となる——が、3つの問題系として提示されている。1) 男性の経済力を支えに「道徳の守護者」として福音主義的な宗教観・道徳観を唱える無給の奉仕活動へと女性たちを駆り立てた19世紀アメリカのプロテスタント白人中産階級「女性の政治文化」は、どのように機能し、また機能しなくなったのか、2) 同時期に、集金力を盾に女性たちもリーダーシップを発揮した福音主義的伝道事業の世界的拡大とその解体は、20世紀初頭に始まり今日に至る神学上の保守対リベラル、また霊性を重視するファンダメンタリズム対世俗的な社会ニーズに適

応するモダニズムの対立とどう関わっているのか、3) またそのような海外伝道事業の変遷に関与した女性たちの体験はアメリカの白人優越帝国主義的文化の構築にどのように関わっていたのか、である。

9章から構成される本著には、対峙するリベラルと保守、またファンダメンタリズムとモダニズムの間を揺れ動きながらも、並外れた集金能力と経営手腕を発揮してアメリカの女性海外伝道事業に大きな足跡を残したルーシー・M・W・ウォータベリ・ピーボディが、1920年頃を境に徐々に時代遅れとなっていく様子が描かれている。最初の5章(1-5章)では、五大湖沿岸の新興都市で慎ましい商人の家庭に育った北部バプテスト教会員のルーシーが、最初の夫のノーマン・ウォータベリ(Norman Waterbury)とともに、アメリカ・バプテスト伝道組合(American Baptist Missionary Union, ABMU)所属の宣教師として赴任したインド・マドラスでの約5年間(1881年11月-1887年3月)の植民地体験が描き出される。小檜山氏によると、その間現地の人々と交流を持ちつつも二人の子供を出産したルーシーは、多くの時間を避暑地で過ごし、彼女の西洋・白人優位の世界観はむしろ強化された。夫の死後1887年に本国に戻ったルーシーは、ABMUの協力組織である婦人アメリカ・バプテスト海外伝道協会(Woman's American Baptist Foreign Missionary Society, WABFMS)の有給職員として、さらにABMUの事業を支える富裕な商人ヘンリー・ピーボディ(Henry H. Peabody)との再婚・死別後には有閑のボランティア役員として、活躍する。19世紀後半、五大湖沿岸の急速な産業化は巨額の富を蓄える敬虔なプロテスタント教徒の「良心的企業家」を生み出し、世紀転換期にはその遺産を受け継いだ妻や娘——カレッジ教育を受けた第一世代となる女性——たちが、女性や家庭保護のために大同団結してその富とエネルギーを注ぎ込んだ。本書は、ピーボディがその優れたビジネス感覚と集金力で、そのような「女性の政治文化」を最大限に活用し、WABFMSのみならず、教派や広く国家を超えて科学や知識の活用を目指す婦人海外伝道事業の拡大に寄与した過程を検証する。そのようなエキュメニカルでリベラルなプロテスタント教会の世界的伝道事業においても男性が主導権を握り続ける一方、さまざまな事情から各教派の男女別伝道組織への統合圧力も増大の一途をたどる。ピーボディはその圧力に抵抗するために超教派の婦人伝道局連合(Federation of the Woman's Boards of Foreign Missions, FWBFM)を組織して女性教会員のエキュメニカルな連帯を図る。またその一方で、男性主導の教会間世界運動(Interchurch World Movement, IWM)に連携して「東洋の7校の女子大学」設立プロジェクトを具体化し、IWMの挫折・崩壊後にはそのプロジェクトを女性たちの一大事業として牽引した。しかし、小檜山氏によると、そのようなピーボディの並外れた手腕は、教派別女性伝道組織として稀なる自律性と独自性を維持してきた北部バプテスト派のWABFMSとエキュメニカルな婦人伝道組織FWBFMの競合を招き、WABFMS事業への募金がFWBFMへ流出するのではないかと懸念を生んでしまう。結果、ピーボディは北部バプテスト内の強い批判にさらされる。

1920年頃から1930年代までを扱った次の3章(6-8章)では、それまで当時のジェンダー規範やバプテスト派の教義に固執することなくリベラルかつエキュメニカルに婦人伝道事業の拡大に力を発揮してきたピーボディが、急速に保守化・ファンダメンタリスト化していく過程が分析される。第一次世界大戦後の世界的なエキュメニカルな活動が伝

道（個人の改宗）よりも国際平和や国際親善を優先し、多大な集金力を持つ婦人伝道組織の活動もそのようなリベラルな流れに同調するが、それに伴う福音事業の衰退がIWMの挫折、また神学上のファンダメンタリズムの台頭や女性のリーダーシップ批判という反動を招いた。ピーボディは、事業拡充のために心血を注いで資金調達した伝道先の宣教師や「ネイティブ」からの西洋支配とキリスト教化への反発に落胆し、それに耳を傾けて伝道再考を促す本国のリベラル派にも憤慨する。小檜山氏は、ピーボディのファンダメンタリスト化には、アメリカ併合間もないフィリピンに赴任したりベラルなABMU所属の宣教師である娘婿が孤高の願望強く妥協でない性格であったという私的な事情も関与していたと分析する。ピーボディは、その娘婿の事業のためにABMUを飛び越えてWABFMSのゴッドマザーと言われたマーガリート・ドーン（Marguerite M. Doane）から直接資金を調達し、WABFMSとは別個の新しい伝道団体——東洋におけるバプテスト福音伝道協会、Inc.（Association of Baptists for Evangelism in the Orient, Inc., ABEO）——を組織して会長に就任する。ABEOはバプテストの根本原理重視を主張してリベラルな既存のABMUやWABFMSとの差別化をはかったため、ピーボディはそれまで活動の場としてきたリベラルなバプテストおよびエキュメニカルな婦人伝道局事業での公的な立場を退くことになる。衰退する伝道事業復活のために霊性を主張し文明ではなく福音の伝搬を掲げるバプテストのABEOはファンダメンタリストにアピールして拡大するが、ピーボディはそのファンダメンタリストたちのミソジニ（女嫌い）を一因に、1935年ABEOからも身を引くことになる。

最終章（第9章）は、アメリカプロテスタント伝道事業のモダニストにもファンダメンタリストにも充分与することのできないピーボディと1920年の憲法修正第18条（全面禁酒）と第19条（婦人参政権）成立後の女性たちの政治闘争に注目する。憲法修正第18条と第19条の成立は女性たちの大同団結を可能にした19世紀プロテスタント白人中産階級の「女性の政治文化」の集大成ともいえるが、第18条がいっこうに守られない事態は、ピーボディらが「愛国心」から組織したという法執行のための婦人全米委員会（Woman's National Committee for Law Enforcement, WNCLE）と一世代若い女性たちが掌握する禁酒法改正のための全米女性団（Women's Organization for National Prohibition Reform, WONPR）との政治対決へと発展する。双方が家庭や子どもの保護という女性特有の義務を主張しながら争われたこの絶対禁酒か節制かを巡る女性同士の闘争は、後者が勝利し、絶対禁酒の時代は1933年の憲法修正第21条成立によって終焉する。小檜山氏は、そこに「政治とは無縁」に「道徳の守護者」として「勤勉・節約」に励み余ったお金と時間は社会のために捧げることで絶大な社会的影響力をもった「女性の政治文化」の崩壊と「目立つための消費」を促す大衆消費文化進展を描き出す。そして、それまでプロテスタント教会組織を基盤に女性の領域の拡大を推し進めながらアメリカの帝国主義的拡大の一助を担ってきたピーボディらプロテスタント白人中産階級の女性たちの運動が「時代遅れ」となっていく様子を浮かび上がらせる。と同時に、小檜山氏は、70歳後半に男女の役割分担と個人の改心を重視する19世紀的保守クリスチアンの論理を用いて女性の連帯の重要性を説くピーボディに「現代フェミニスト神学に通じるような聖書理解の芽」を見出している。

以上が、アメリカ女性史を専門とする評者が読みとった大雑把な要旨であるが、ピーボディの一貫性に欠ける行動は、プロテスタント教会に集う白人中産階級女性の利他的

活動を起源として世紀転換期に高揚した様々な女性運動が、男性牛耳る組織や社会の中で、「日和見的」姿勢で左右に揺れ動く世相に敏感に反応しながら、それぞれ目的を達成しようとしたことを彷彿させる。実際、ピーボディの活動の軌跡は、同時期にセツルメント運動や平和運動を牽引したジェーン・アダムズ (Jane Addams, 1860–1935) や、婦人参政権運動を勝利に導いたキャリー・チャップマン・キャット (Carry Chapman Catt, 1859–1947) らのそれと重なり合う部分が多い。ピーボディは正式にはカレッジ卒業者ではないが聾啞教育に携わりながらロチェスター大学の聴講生として学んでおり、アダムズやキャット同様に南北戦争後の北部中産階級の家庭に育ち高等教育を受けた白人女性、つまり「新しい女性」第一世代に属していたといえるだろう。また、アダムズは親の遺産を受け継いで、キャットはピーボディ同様二度の結婚により、有閑ボランティアとして社会活動に邁進するが、禁欲的な生活習慣や利他的なボランティア精神を身につけていた。そして19世紀のジェンダー規範が定める女性の領域や特性そしてそれを遵守することで得られる尊厳及び社会的地位 (respectability) を手放すことなく、女性らしからぬ組織力や経営手腕を発揮して女性の自治空間を広く男性の領域へ拡大し、その規範の拘束力をとり崩していった。しかし、これら新しい女性の第一世代は、男性と同等の権利やより自由に女性の自己実現を求める若い世代の出現に保守化した。女性史家のナンシー・コット (Nancy F. Cott) 同様小檜山氏も示唆するように、19世紀のジェンダー規範は女性の男性への従属を強いるというマイナス面と女性の領域や役割を限定することで女性たちの大同団結を可能にするというプラス面、つまり両面性を有していたのである。¹⁾ それを巧みに利用しながら女性の領域拡大やエンパワメントに努めてきた新しい女性第一世代は、1920年頃から第二世代の女性たちによってその運動が新たな展開を始めると、女性の大同団結を可能にする男女の領域の崩壊に危機感を覚えて保守化し、女性の役割、禁酒、労働保護法、男女平等憲法修正条項 (Equal Rights Amendment, ERA) を巡って複雑な闘争を展開した。

また、1920年代はじめWNCLEを組織して憲法修正第18条執行のための政治運動を牽引したピーボディの突然の変化とも見える行動は、おそらく彼女が深く関わった宗教を媒体とする海外女性伝道組織を草の根レベルで支えた女性たちが、より世俗的な婦人キリスト教禁酒同盟 (Woman's Christian Temperance Union, WCTU) やキリスト教女子青年会 (Young Women's Christian Association, YWCA) のみならず、宗教を媒体としない女性組織や機関——キャット率いる全国アメリカ婦人参政権協会 (National American Woman's Suffrage Association, NAWSA) やその後続組織である全国女性有権者同盟 (National League of Women Voters, NLWV)、またアダムズがシカゴの移民街で経営したハル・ハウス (Hull House) やその元住人が児童や移民女性労働者保護のために設立した連邦の児童局や女性局——を支える活動にも関わっていたであろうことを示唆してくれる。実際、草の根レベルでは、一人の女性が、指導層では対立する複数の女性組織の会員となっていることも稀ではなかった。そのような草の根レベルの女性たちの支持を集結して全国にまた世界に拡大していった各々の女性組織は、各時代の女性に関わる問題を巡って統合や分裂また連携や対立を繰り返していたのではないだろうか。

¹⁾ Nancy F. Cott, *The Bonds of Womanhood: "Woman's Sphere" in New England, 1780–1835* (New Heaven, CT: Yale University Press, 1997).

そのように複雑に絡み合いながら展開されたプロテスタント白人中産階級の女性たちが牽引したアメリカの社会運動は、キリスト教/西洋的システムつまり白人優位を前提とし、非キリスト教/東洋そして非白人社会の「恵まれない」子供や女性の向上 (uplift) に手を貸さなくてはならないという使命感に基づいていた。小檜山氏は、特に福音主義的海外伝道事業について、19世紀の終わりには「リフレックス・インフルエンス (影響の反射)」——海外伝導地への善行が本国の霊性を高める効果——を唄って順調に拡大したが、20世紀になるとデイビッド・ホリンジャ (David Hollinger) の指摘する「ブーメラン効果」——海外で現地人と親密に交流した宣教師やその子供たちの文化的相対主義が本国の中産白人文化至上主義を揺るがしてリベラリズムを醸成する効果——によって宗教色の濃い海外伝道事業は衰退を余儀なくされ、²⁾ それに対する反動がファンダメンタリズムの反逆とアイデンティティ固めを招き、結果、保守とリベラル、また科学の力や生活の豊かさを重視するモダニストと霊性を重視するファンダメンタリストの対立が顕著化したと分析する。

そのような状況下で、ピーボディは左右に揺れ動きながら国内また国際的な活動を推進したが、海外伝道地と本国間の現象として理解されがちな「ブーメラン効果」は、多様な異文化や「異人種」を内包したアメリカ国内にも存在した現象で、相互に複雑な相乗効果を生み出していたと考えられる。例えば世紀転換期に工業都市でセツルメント・ハウスを運営し非プロテスタントまた非キリスト教徒の新移民と緊密に交流したアダムズらは、それら貧困に苦しむ移民労働者の救済や生活改善にはアメリカ自らの自由放任な資本主義システムの根本的改善が必要であることを認識し、児童労働の禁止や女性労働者保護のための立法に尽力した。この新しい女性第一世代の文化相対主義的でリベラルな取り組みは、例えば当時女性にも門戸を開き始めた高等教育機関に拡大したキリスト教を媒介とする活動——本著でも言及されているYWCAや学生ボランティア運動 (Student Volunteer Movement) ——を通して若い世代の「新しい女性」たちにも波及した。米国YWCAは、当時中産階級の子供向けだけではなく女性移民労働者を含む都市移住者向けの事業を展開中で、その活動を通して専門知識や文化的相対主義を身につけた若い世代のメンバーたちが、科学や知識の伝搬を重視するモダニスト的でリベラルかつエキユメニカルな「新しい伝道活動」を世界に展開した。20世紀初頭その主な活動地となった中国に焦点を当てたカレン・ガーナー (Karen Garner) や佐々木一恵氏らによる研究は、新たな伝道活動に従事したアメリカの新世代の「新しい女性」たちが中国の「新しい女性」のナショナリズムや帝国主義批判に直面すると、伝道地またアメリカ本国で対峙する保守とリベラル、モダニズムとファンダメンタリズム、さらには資本主義と社会主義・共産主義の間を揺れ動いたことを示唆している。³⁾ 利他的であるはずの福音主義的な社会運動が利己的な帝国主義と協働するという矛盾を抱えたまま、女性の連帯を目指して階級・人種・文化・教派・国家の境を超えようとしたプロテスタント中産白人女性の国内外での社会活動は、アメリカ

²⁾ David Hollinger, *Protestants Abroad: How Missionaries Tried to Change the World but Change America* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 2017).

³⁾ Karen Garner, *Precious Fire: Maud Russell and the Chinese Revolution* (Boston: University of Massachusetts Press, 2003); Motoe Sasaki, *Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016).

合衆国主導のグローバル化に双方的かつ重層的な役割を果たしたようである。

以上、本書を読んで思い巡らした考察の一部であるが、ピーボディが所属した北部バプテストの人種観やジェンダー観、またアメリカ国内全般において再建の時代後に後退したと考えられる人種や性の平等意識がその事業にどのように作用したのかなど、様々なことへの興味がかきたてられる。ルーシィ・ピーボディという一女性の生涯を客観的に描写・分析しながら新興国アメリカが「帝国」として国際的影響力を拡大した時代を壮大なスケールで描き出すこの歴史書は、多様な分野の研究者に様々なインスピレーションを与えてくれる。まさに必読の一冊である。